

第19歌 オデュッセウス、ペネロペとの出会い、足洗いの場

[オデュッセウス](#)父子は広間の武器を隠す。オデュッセウスは[ペネロペ](#)と初めて対面し、窮状を訴える妃に、うその身の上を語り、オデュッセウスが近く帰国するという。老女[エウリュクレイア](#)はオデュッセウスの足を洗う時、古い傷痕を見て、正体に気付くが、オデュッセウスに口止めされる。妃は結婚相手を選ぶため、翌日弓の競技を開催することを明かす。

内容

オデュッセウス、ペネロペと対面する 広間に残った[オデュッセウス](#)は[テレマコス](#)に「武器をみな奥へ片付けよ」といった。二人は一緒に広間の武器を片付けた。[テレマコス](#)は寝室に去り、[オデュッセウス](#)は部屋に残っていた。そこへ[ペネロペ](#)が降りてきて、炉の傍らに腰をおろした。この時女中[メラント](#)がオデュッセウスに「この乞食め、さっさと出ておいき」と毒づいた。オデュッセウスは、「わしも昔は裕福であった。お前も今の栄耀を失わないよう気をつけるのだな」といった。ペネロペもメラントを叱りつけた。「私がこの客人に、夫の消息を訊こうとしていることは、いっておいただろう」ペネロペはオデュッセウスに素性や出身をたずねたが、オデュッセウスは昔を思い出すのが辛いからと答えなかった。

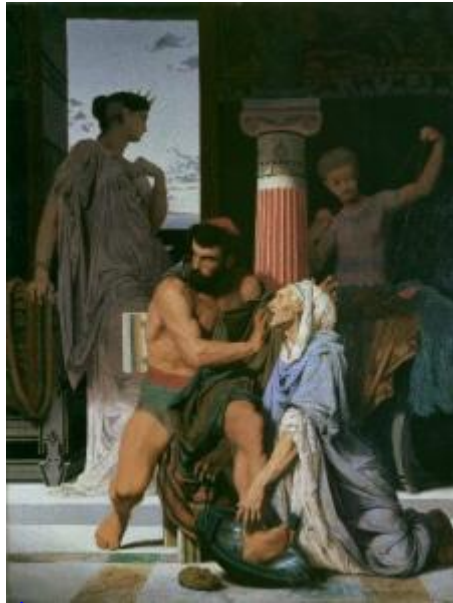
ペネロペ、悲しい身の上を語る ペネロペはいった。「夫の[オデュッセウス](#)が[イリアス](#)目指して出征して以来、近隣の王侯や貴族たちが、嫌がる私を妻にと求め、屋敷を荒らしています。結婚を迫る彼らに私は策をめぐらしました。部屋に大きな機を据え、布を織ることにし、求婚者たちに言いました。『この布を織り上げるまで待ってください。これは老雄[ラエルテス](#)が亡くなった時に備えて、甲いの衣裳として織っているものです』そして昼のうちは機を織り、夜はそれをほどこことを続けたのです。三年間、求婚者をあざむきましたが、四年目に恥知らずの女中らの密告で、仕事の現場を押さえられてしまいました。もはや結婚をのがれる口実もありません。両親は私に結婚せよと迫り、息子は求婚者が財産を食いつぶすのを辛がっています。それはともかく、そなたはどこ出身なのか素性を明かして下さいな」

オデュッセウス、うその身の上を語る 妃に答えて[オデュッセウス](#)がいった。「ではお話ししましょう。[クレテ](#)の王[デウカリオン](#)が私の父でした。デウカリオンは私と[イドメネウス](#)王の二人の息子をもうけました。私の名は[アイトン](#)といいます。私はここで、[トロイア](#)へ向かう途中、クレテに漂着されたオデュッセウス王に会いました。私は王を屋敷へお連れして、もてなしました。王はこの地に十二日間滞在しました」[オデュッセウス](#)が作り話をまことしやかに語ると、[ペネロペ](#)は涙にくれて悲しんだ。

老女、オデュッセウスの傷痕に気づく [オデュッセウス](#)は、「奥方よ、実は私が先頃聞いたところでは、王はこの近く、[テスプロトイ](#)人の土地に息災でおられるそうです。近いうちに必ずお帰りになられるでしょう」といった。[ペネロペ](#)は、「そなたのいう通りになってくれればよいが、さあ、[エウリュクレイア](#)よ、この方の足を洗って寝床に案内してあげなさい」といった。老女は金だらいに湯を注ぎ、オデュッセウスに近づいて、足を洗いかけた時、足の古い傷痕に気がついた。かつてオデュッセウスが、母の父[アウトリュコス](#)を訪ねた時、猪の牙にかかって付けられたものであった。

オデュッセウスが猪に傷をつけられた次第 [アウトリュコス](#)は名高い盗賊だった。彼が[イタカ](#)を訪れたとき、孫の名付け親を頼まれた。アウトリュコスは、「わしはこれまで多くの人間に憎まれて（オデュッサメノス）きた。されば、この子には[オデュッセウス](#)という名を付けるがよい」といった。やがて成長した[オデュッセウス](#)は、[パルナッソス](#)を訪れた。[アウトリュコス](#)と妻[アンピテエ](#)と息子たちは暖かく彼を迎えた。次の朝、アウトリュコスの息子たちは獵に出て、オデュッセウスも彼らに随った。パルナッソス山を越えた所で、巨大な猪が一行の前に立ちふさがった。猪はオ

デュッセウスの膝の上を、牙で深くえぐった。オデュッセウスは槍で猪の右肩を刺して、これを倒した。皆はすぐに屋敷に戻り、オデュッセウスの傷を手当てしたが、傷が消えることはなかった。



([画像/オデュッセウスに気付くエウリュクレイア](#))

オデュッセウス、老女に口止めする [エウリュクレイア](#)は足の傷痕に気づくと、「あなたは間違いなく[オデュッセウス](#)さまですね」と泣いた。そのとき、[アテナ](#)がペネロペの心をほかに逸らしたため、彼女が気づくことはなかった。オデュッセウスは、「婆やよ、誰にも知らせてはならぬぞ」といった。老女はオデュッセウスの足を洗い、油を塗った。オデュッセウスは再び炉のそばに座った。

ペネロペ、見た夢を語る [ペネロペ](#)はいった。「客人よ、私は二つの道の間で迷っています。このまま屋敷に留まるべきか、それとも求婚者の一人と結婚するべきか。それで、これから話す私の見た夢をきいて、その意味を解いて下さらぬか。屋敷の中で二十羽のガチョウが小麦をついばんでいると、大ワシが山から飛んできて、全部のガチョウを殺してしまった。私は悲しんでいた。そのうち、ワシが舞い戻ってきて、『これは夢ではない。ガチョウは求婚者であり、私はそなたの夫として、求婚者全員に悲運を下すべく、ここに参ったのだ』という、私は眠りからさめました」[オデュッセウス](#)は、「明らかに求婚者全員に破滅が迫っているのでしょうか」といった。

ペネロペ、弓の競技の開催を明かす [ペネロペ](#)は、「もう一つお話することがあります。実は私はこれから斧を使って競技を催そうと思っているのです。以前夫はよく、全部で十二本の斧を一列に並べ、遠くに立って、そこから矢を射通していたものです。私は求婚者たちにこの競技を催してやるつもりです。十二の斧を残らず射通したものに、私はこの屋敷を出て随っていくでしょう」といった。[オデュッセウス](#)は、「奥方よ、その競技をお延ばしなさいませぬ。求婚者どもが斧を射通す前に、オデュッセウス王はここに帰ってこられるでしょうから」といった。それからペネロペは就寝の挨拶をして、女中たちを伴って寝室へ引きあげ、眠りについた。

関連

人名

(作成中)

地名

(作成中)

[前へ](#) ... [オデュッセイア](#) ... [次へ](#)